

市の人口と予算(2月1日現在)

人口・世帯 ()内は前月比/前年同月比

合計 = 185,396人 (+325/+4,859)

男 = 91,682人 (+154/+2,422)

女 = 93,714人 (+171/+2,437)

世帯 = 76,641世帯 (+176/+2,593)

予算

一般会計 = 546億8,944万6千円

特別企業会計 = 480億6,201万3千円

特集：流山の歴史と文化

今も昔も住みやすいまち・流山でタイムトラベル！

新たな発見・つながる歴史

流山には、古から続く人びとの暮らしがあります。その積み重ねが、豊かな文化となって現在に伝えられてきました。今号では、身近にある文化財

などから流山の歴史を紹介します。学校や寺院、店舗などで見られるものを手がかりに、「昔の流山」へタイムトラベルしてみませんか。



毎年1月20日に行われる「鱒ヶ崎おびしゃ行事」でのお囃子と神楽の奉納



明治のころより使われている「方上」「天晴」のみりんだるをかたどった打ち菓子の型(左)

赤城保存会は、古くからの地域に伝わる祭囃子を後世に伝えようと昭和49年に結成しました。平成25年9月には、市指定無形文化財「流山の祭囃子、神楽等」の保持団体として認定されました。現在、10代から90代までの12人で活動しており、結成当時の会の会員も3人います。

また、地域の伝統文化の保存と活用を目的に、お囃子などをCDにおさめて神社や自治会へ贈呈も行いました。近年は、地域の祭礼への来場者が増加しているように感じます。歴史ある流山の伝統芸能を楽しんでいただくことで、見に来た方に伝えていきたいと思えます。一緒に活動してくださる方も増えるところでしょう。



流山の伝統芸能を後世に伝えていきたい
赤城保存会 会長 木村昇治さん

清水屋の創業は明治35年(1902年)。店舗兼住宅として使用しているこの建物は、初代店主が和菓子作りを始めるために購入しました。正確には分かりませんが、築130年ほどたっているようです。店舗正面の看板は創業当時のものです。補修のために色は塗り替えましたが、現在では再現できない職人の技巧を確認することができ、建具も古いままで、当時の面影を残しています。



店舗兼主屋(国登録有形文化財)

文化的な価値がある家に住んでいるという意識は全く持っていませんでしたが、国登録有形文化財となった今では誇りを持つようになり、自宅であると同時に、公のものでもあると考えるようになりました。

築130年の店舗と自慢の味を守り続ける
和菓子司 清水屋四代目 石井憲光さん

立地からひもとく流山の豊かな歴史

流山市文化財審議会 会長 小川浩さん



江戸時代から明治時代にかけて、産業に恵まれた流山は経済が発展し、のびのびと自由な生活様式が育まれました。市内の史跡や文化財を訪ね歩き、そんな繁栄の歴史に思いを馳せてみるのもいいものです。

歴史の楽しみ方としてお勧めしたいのが地形観察です。例えば流山本町の赤城神社(3面参照)は、なぜあれほど高い土地にあるのでしょうか。それは、その昔、神社やお寺は街中ではなく、生活圏の外側に建てられていたからです。市内のほかの神社やお寺が建てられているのも、かつて村と山の境界だった場所だと推測できます。このように地形に隠されたヒントを基に、遠い昔の生活をしのぶのも歴史の楽しみ方のひとつです。

皆さんも、そんな視点で流山の新しい魅力を探してみませんか。

市内で5番目の国登録有形文化財 松ヶ丘一号型街路灯

松ヶ丘団地は昭和31年(1956年)に分譲が開始された、市内で最初の住宅団地です。当時、住民の主導で20基以上が設置された街路灯は、洋風のモダンなデザインで、防犯に効果を発揮するとともに、街を明るく照らす団地のシンボルになりました。平成25年(2013年)、唯一完全な形で現存する1基が陽廣院(松ヶ丘)に移設されました。その後も大切に保存され、平成29年(2017年)に国登録有形文化財に登録されました。



街路灯が並ぶ松ヶ丘団地=昭和42年(1967年)ごろ



保存されている街路灯(陽廣院)

歴史さんぽ 利根運河 エリア



B 運河水辺公園

運河橋近くの両岸に広がる憩いの広場。自然豊かで多くの野鳥や野草、貴重な植物が生育しています。また、桜のライトアップや朝市なども行われています。

C ビリケンさん

大正2年(1913年)に、利根運河を開削した利根運河株式会社支配人・森田繁男が、観光や集客のために建立しました(詳細は、下記「ビリケンさんを流山市の幸福大使に任命」参照)。
※ビリケン像:明治41年(1908年)にアメリカの芸術家が制作し世界中で流行

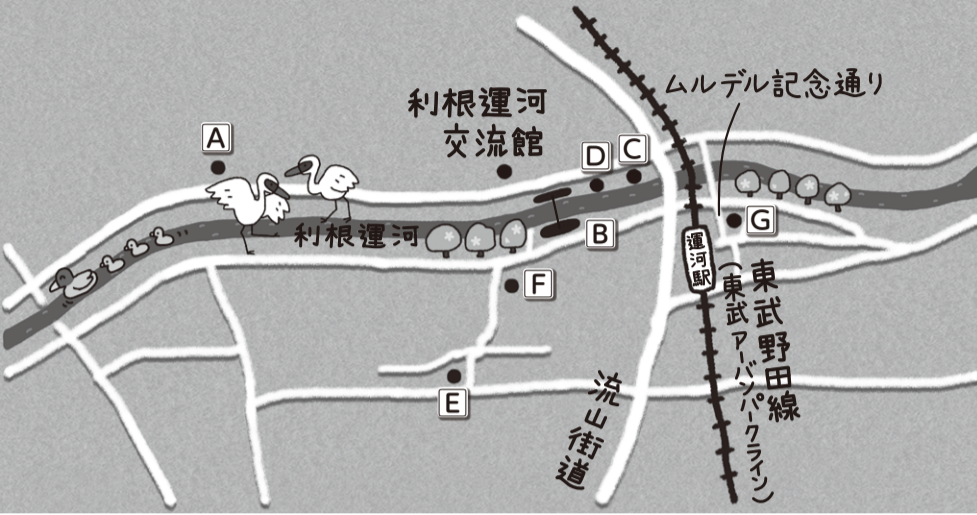
D 手水石

明治36年(1903年)に、利根運河株式会社から功績を讃えられた取締役・今村清之助に贈られた品。運河通水125周年の平成27年(2015年)に遺族の方から市に寄贈していただきました。



A 利根運河大師堂

大正時代に創建された新四国八十八カ所運河霊場。当初は堤防上にあり、一度は立ち退きましたが、昭和61年(1986年)に、流山・柏・野田の有志により当初に近い形で復元されました。



E カナルファーム

利根運河の設計・監督を行ったムルデルゆかりの農家。ムルデルが寄居していた母屋の離れは現存しませんが、隣接の井戸小屋は改築され、野菜や果物などの直売所「ido」になっています。



F ブラッスリーしんかわ

かつての船宿を移築し明治時代に創業された割烹旅館の旧館を利用したフレンチレストラン。また改装した古い蔵はギャラリーとして活用されています。



G ギャラリー平左衛門

明治27年(1894年)築の合掌造りの2階建ての蔵を改装したギャラリー。運河の河畔にあり、孟宗竹と梅の古木に囲まれた落ち着いたたたずまいです。



ビリケンさんを 流山市の幸福大使に任命

利根運河を100年以上見守ってきた、福の神「ビリケンさん」。日本では大阪の通天閣にあるビリケンさんが有名ですが、流山市のビリケンさんは現存する石像では日本最古ともいわれています。

市では、このビリケンさんを流山市の幸福大使に任命し、利根運河の新たな観光スポットとしてPRしていきます。また、3月24日には、通天閣のビリケンさんが流山に出張してきて、コラボレーションイベントが行われます。ビリケンさんの足の裏を触ると、福が寄ってくると言われていました。西の通天閣ビリケンと、東の利根運河ビリケンのダブルパワーにあやかってみませんか。

日 3月24日(土) 10時40分～12時30分

所 運河水辺公園(東深井)

内 幸福大使任命式、西深井小学校による吹奏楽演奏、通天閣交響楽団プレミアムライブ

▷同日開催=うんがいい! 朝市、利根運河マラソン大会

固 流山本町・利根運河ツーリズム推進課

☎ 7168-1047



オランダ遺産 利根運河の歴史



ムルデルの肖像

行き交う船は年間4万隻 関東水運の要に

江戸時代から計画されていた利根川と江戸川を結ぶ利根運河は、明治21年(1888年)に民間の利根運河株式会社が、優秀な土木技師であるオランダ人のムルデルに設計と監督を担当させ、運河開削が始まりました。掘削、築堤の工事とも軟弱な地盤による地盤沈下などで難航しましたが、2年後の明治23年(1890年)に完成しました。

利根運河の完成により、房総沖をまわる海上航路から、銚子から利根運河を通る船運に切り替えることで、東京への物資輸送にかかる時間は大幅に短縮されました。開業の翌年の明治24年(1891年)には和船の年間通航数は3万7千隻を数えました。その後、蒸気機関を

動力とした汽船の通航が始まり、定期航路も開設されると観光などの旅客も増加していきました。

洪水や渇水、時代の変化とともに役割を終える

しかし、輸送方法が次第に陸路中心となり、洪水や渇水などにより通航ができなくなることも度々ありました。昭和16年(1941年)、大洪水による壊滅的な打撃をき

かけに、約50年間の水運としての役割を終えました。

平成18年(2006年)、地形を巧みに活用して掘られたことなどが評価され、土木学会の選奨土木遺産に、平成19年(2007年)には経済産業省の近代化産業遺産に選ばれました。今年で完成から128年を迎える利根運河は、水のある安らぎの空間として、世代を超えて人びとに親しまれています。



運河を航行する汽船「銚子丸」=大正4年(1915年)

日蘭両皇太子殿下もご視察に

平成22年(2010年)9月には、利根運河通水120年にちなみ、皇太子殿下とオランダのアレキサンダー皇太子殿下(現在のオランダ国王)が視察されました。当日は、運河水辺公園をご一緒に歩かれ、「利根運河碑」や「ムルデルの碑」などを熱心にご覧になり、しばしムルデルの功績をしのばれました。



流山本町江戸回廊

100年以上の歴史がある流山本町には、貴重な文化財が数多く点在しています。武士や商人、文人たちが行き交った江戸～明治～大正時代に思いを馳せて、街歩きを楽しんでみませんか。



昭和36年(1961年)ごろの街並み



A 赤城神社
赤城山(群馬県)の土が流れ着いてできたとされている神社の小山が「流山」の由来ともいわれています。毎年10月に行われる「大しめ縄行事」は市指定無形民俗文化財です。



B 一茶双樹記念館
白みりんの醸造で財をなした秋元三左衛門の本家跡。五代目・三左衛門(俳号:双樹)と親交のあった小林一茶はたびたびこの家を訪れ、俳句を残しました。



★…国登録有形文化財
☆…市指定有形文化財



C 万華鏡ギャラリー 寺田園茶舗 見世蔵
明治22年(1889年)に建てられた茶の店「寺田園茶舗」の旧店舗を改装。市内在住の万華鏡作家・中里保子さんの作品展示などを行っています。



D 閻魔堂 (木造閻魔王坐像)
明治34年(1901年)に再建されたお堂。安永5年(1776年)ごろに作られた閻魔王坐像が祀られています。



E 近藤勇陣屋跡
新選組局長・近藤勇の最後の陣営地。流山は副長・土方歳三との今生の別れの地となりました。



F 常与寺
明治5年(1872年)に教員養成のため「印旛官員共立学舎」が設置された場所です。縮本著色日蓮上人像が市指定有形文化財です。



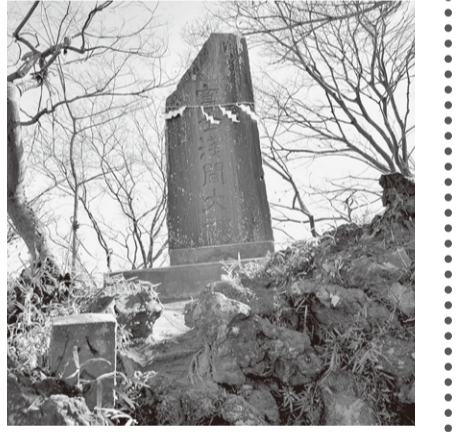
G 浅間神社
富士信仰のため根郷地域の鎮守さまとして、正保元年(1644年)に創建。本殿裏手の富士塚(田)は、江戸時代に多くの参拝者で賑わいました。

H 浅間神社の富士塚

流山広小路の浅間神社(G)の社殿の裏にある富士塚。その高さは約8mで、1合目から9合目までを示す石造物などがあり、登り切ったところには富士浅間大神の碑(=写真)が建てられています。

江戸時代後期、関東では富士講を結成して富士山に登拝することが大流行しました。そこで町内の人々は、富士山まで行けない人のために、明治25年(1892年)に富士山の溶岩を江戸川で運んで富士塚を造ったといわれています。頂上まで登ることで、実際に登ったのと同じ御利益を得たいと願う庶民の心が感じられます。

現在でも富士塚に登ることができ、天気の良い日には、塚の上部から遠方に富士山を望むことができます。



I 流山に裁判所があった

中央図書館・博物館の入口には「葛飾県印旛県史跡」の碑が建っています。149年前の明治2年(1869年)から4年間、葛飾県・印旛県の県庁が流山にありました。明治5年(1872年)には加村には裁判所が、流山村には教員を養成する学校が設置されたとの記録が残っています。

昨年9月に博物館の隣で宅地開発に伴う発掘調査が行われました。調査では、弥生時代・古墳時代の集落とともに、県庁があったころの生活道具が出土しました。その一つに、磁器でできた水滴(硯)にさす水を入れる容器(=写真)が発掘され、その側面に右

書きで「裁判所」と墨書きされているのが確認されました。裁判所が加村にあったことを証明する史料で、とても貴重な発見となりました。



「裁判所」の墨書き

149年前の明治2年(1869年)1月13日、流山の加村は、房総地方の最初の県庁所在地となった。流山に県庁が置かれた理由は、江戸・利根川の舟運の利があったこと、加村台屋敷の大きさが県庁に適當であったことに加え、みりん

新政府は、下総国に「葛飾県」を置き、現静岡岡藤枝市にあった田中藩が加村台に設けた「本多家加村台御屋敷」(通称田中藩陣屋)を県役所(現県庁)に決定した。当時、空き家となっていた御殿と54軒の長屋は、県役所に絶対の施設であった。

明治6年(1873年)6月15日、印旛県と木更津県が合併して千葉県が誕生し、県庁や裁判所、印旛官員共立学舎は千葉町(現千葉市中央区)に移った。県庁が置かれたことは、流山の当時の繁栄を示しており、博物館では当時を物語る資料が見られる。

現在でも富士塚に登ることができ、天気の良い日には、塚の上部から遠方に富士山を望むことができます。

また、同年に印旛裁判所が設置され、現在の市役所付近に置かれた。裁判所もまた県庁と同じく、千葉県下で初めて流山に置かれた。

初代県令には河瀬秀治が任命された。河瀬は明治5年(1872年)、いち早く「印旛官員共立学舎」を立ち上げ、千葉県近代教育をリードした。その伝統は、現在の流山小学校に引き継がれている。



明治初期、木村を除く現流山市域の村々は「葛飾県」やそれに続く「印旛県」に属し、両県の県庁所在地が現在の加に置かれていた。現在の中央図書館・博物館の敷地にある「葛飾県印旛県史跡」の碑(=写真)は、ここに県庁があったことを記念して建てられた。

明治4年(1871年)に廃藩置県が断行され、続く府県統合により、下総国では葛飾県を母体に旧藩の6県を併せて「印旛県」が成立した。印旛県の県庁や裁判所は、引き続き旧葛飾県庁の加村に置かれた。総石高は約46万石、県民約46万人に達した。

なお、安房・上総には、1カ月遅れで宮谷県が設置された。葛飾県は、下総国の大名領を除く7郡と武蔵国葛飾郡北部におよび、総石高28万石、県民約23万人であった。

などの醸造業で栄えた有力商人の存在があったことである。

なお、安房・上総には、1カ月遅れで宮谷県が設置された。葛飾県は、下総国の大名領を除く7郡と武蔵国葛飾郡北部におよび、総石高28万石、県民約23万人であった。

流山本町・江戸回廊さんぽ ⑪
房総地方最初の県庁所在地
NPO法人流山史跡ガイドの会

流山本町 江戸回廊

100年以上の歴史がある流山本町には、貴重な文化財が数多く点在しています。武士や商人、文人たちが行き交った江戸～明治～大正時代に思いを馳せて、街歩きを楽しんでみませんか。



昭和36年(1961年)ごろの街並み



A 赤城神社
赤城山(群馬県)の土が流れ着いてきたとされている神社の小山が「流山」の由来ともいわれています。毎年10月に行われる「大しめ縄行事」は市指定無形民俗文化財です。



B 一茶双樹記念館
白みりんの醸造で財をなした秋元三左衛門の本家跡。五代目・三左衛門(俳号:双樹)と親交のあった小林一茶はたびたびこの家を訪れ、俳句を残しました。



C 万華鏡ギャラリー 寺田園茶舗 見世蔵
明治22年(1889年)に建てられた茶の店「寺田園茶舗」の旧店舗を改装。市内在住の万華鏡作家・中里保子さんの作品展示などを行っています。

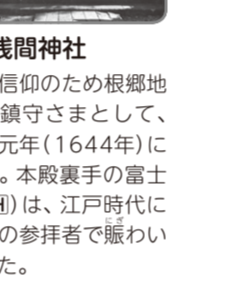
D 間魔堂 (木造閻魔王坐像)
明治34年(1901年)に再建されたお堂。安永5年(1776年)ごろに作られた閻魔王坐像が祀られています。



E 近藤勇陣屋跡
新選組局長・近藤勇の最後の陣営地。流山は副長・土方歳三との今生の別れの地となりました。



G 浅間神社
富士信仰のため根拠地域の鎮守さまとして、正保元年(1644年)に創建。本殿裏手の富士塚(塚)は、江戸時代に多くの参拝者で賑わいました。



H 浅間神社の富士塚

流山広小路の浅間神社(G)の社殿の裏にある富士塚。その高さは約8mで、1合目から9合目までを示す石造物などがあり、登り切ったところには富士浅間大神の碑(=写真)が建てられています。江戸時代後期、関東では富士講を結成して富士山に登拝することが大流行しました。そこで町内の人々は、富士山まで行けない人のために、明治25年(1892年)に富士山の溶岩を江戸川で運んで富士塚を造ったといわれています。頂上まで登ることで、実際に登ったのと同じ御利益を得たいと願う庶民の心が感じられます。



I 流山に裁判所があった

中央図書館・博物館の入口には「葛飾県印旛県史跡」の碑が建っています。149年前の明治2年(1869年)から4年間、葛飾県・印旛県の県庁が流山にありました。明治5年(1872年)には加村には裁判所が、流山村には教員を養成する学校が設置されたとの記録が残っています。昨年9月に博物館の隣で宅地開発に伴う発掘調査が行われました。調査では、弥生時代・古墳時代の集落とともに、県庁があったころの生活道具が出土しました。その一つに、磁器でできた水滴(覗)にさす水を入れる容器=写真)が発掘され、その側面に右



「裁判所」の墨書き

149年前の明治2年(1869年)1月13日、流山の加村は、房総地方の最初の県庁所在地となった。流山に県庁が置かれた理由は、江戸・利根川の舟運の利があったこと、加村台屋敷の大きさが県庁に相当であったことに加え、みりん

新政府は、下総国に「葛飾県」を置き、現御県藤枝市にあった田中藩が加村台に設けた「一本多家加村台御屋敷」(通称田中藩陣屋)を県役所現県庁に決定した。当時、空き家となっていた御殿と54軒の長屋は、県役所に絶対的施設であった。

明治6年(1873年)6月15日、印旛県と木更津県が合併して千葉県が誕生し、県庁や裁判所、印旛官員共立立学舎は千葉町(現千葉市中央区)に移った。県庁が置かれたことは、流山の当時の繁栄を示しており、博物館では当時を物語る資料が見られる。

明治初期、木村を除く現流山市域の村々は「葛飾県」やそれに続く「印旛県」に属し、両県の県庁所在地が現在の加に置かれていた。現在の中央図書館・博物館の敷地にある「葛飾県印旛県史跡」の碑(=写真)は、ここに県庁があったことを記念して建てられた。

流山本町：江戸回廊さんぽ 房総地方最初の県庁所在地 NPO法人流山史跡ガイドの会

歴史さんぽ 利根運河 エリア



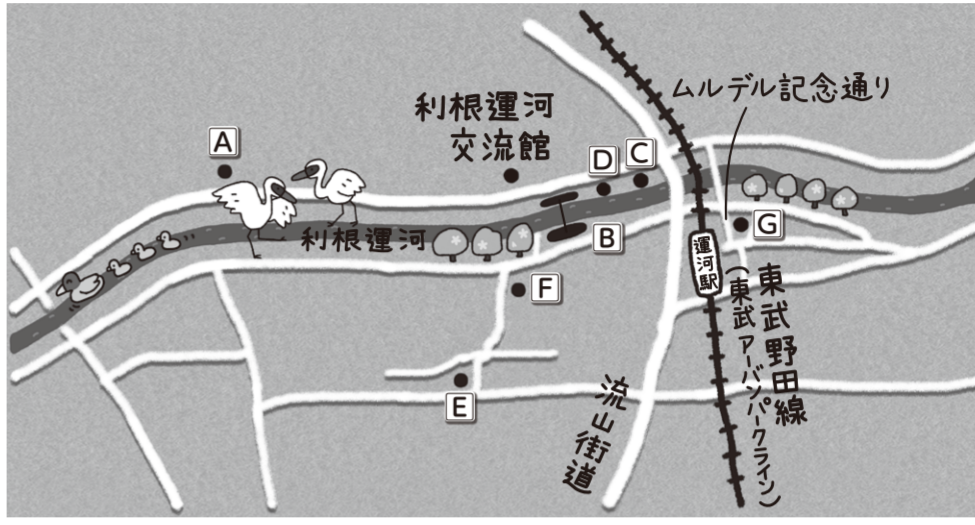
A 利根運河大師堂
大正時代に創建された新四国八十八所運河霊場。当初は堤防上にあり、一度は立ち退きましたが、昭和61年(1986年)に、流山・野田の有志により当初に近い形で復元されました。



E カナルファーム
利根運河の設計・監督を行ったムルデルゆかりの農家。ムルデルが寄宿していた母屋の残骸は現存しませんが、隣接の井戸小屋は改装され、野菜や果物などの直売所「idō」になっています。



B 運河水辺公園
運河橋近くの両岸に広がる憩いの広場。自然豊かで多くの野鳥や野草、貴重な植物が生育しています。また、桜のライトアップや朝市なども行われています。



F ブラッスリーしんかわ
かつての船宿を移築し明治時代に創業された割烹旅館の旧館を利用したフレンチレストラン。また改装した古い蔵はギャラリーとして活用されています。

C ビリケンさん
大正2年(1913年)に、利根運河を開削した利根運河株式会社支配人・森田繁男が、観光や集客のために建立しました(詳細は、下記「ビリケンさんを流山市の幸福大使に任命」参照)。 ※ビリケン像：明治41年(1908年)にアメリカの芸術家が制作し世界中で流行

手水石
明治36年(1903年)に、利根運河株式会社から功績を讃えられた取締役・今村清之助に贈られた品。運河通水125周年の平成27年(2015年)に遺族の方から市に寄贈していただきました。



G ギャラリー平左衛門
明治27年(1894年)築の合掌造りの2階建ての蔵を改装したギャラリー。運河の河畔にあり、孟宗竹と梅の古木に囲まれた落ち着いたたたずまいです。

オランダ遺産 利根運河の歴史



ムルデルの肖像

行き交う船は年間4万隻 関東水運の要に

江戸時代から計画されていた利根川と江戸川を結ぶ利根運河は、明治21年(1888年)に民間の利根運河株式会社が、優秀な土木技師であるオランダ人のムルデルに設計と監督を担当させ、運河開削が始まりました。掘削、築堤の工事とも軟弱な地盤による地盤沈下などで難航しましたが、2年後の明治23年(1890年)に完成しました。利根運河の完成により、房総沖をまわる海上航路から、銚子から利根運河を通る船運に切り替えることで、東京への物資輸送にかかる時間は大幅に短縮されました。開業の翌年の明治24年(1891年)には和船の年間通航数は3万7千隻を数えました。その後、蒸気機関を

動力とした汽船の通航が始まり、定期航路も開設されると観光などの旅客も増加していきました。

洪水や濁水、時代の変化とともに役割を終える

しかし、輸送方法が次第に陸路中心となり、洪水や濁水などにより通航ができなくなることも度々ありました。昭和16年(1941年)と大洪水による壊滅的な打撃をきつ

かけに、約50年間の水運としての役目を終えました。平成18年(2006年)、地形を巧みに活用して掘られたことなどが評価され、土木学会の選奨土木遺産に、平成19年(2007年)には経済産業省の近代化産業遺産に選ばれました。今年で完成から128年を迎える利根運河は、水のある安らぎの空間として、世代を超えて人びとに親しまれています。



運河を航行する汽船「銚子丸」=大正4年(1915年)

日蘭両皇太子殿下もご視察に

平成22年(2010年)9月には、利根運河通水120年にちなみ、皇太子殿下とオランダのアレキサンダー皇太子殿下(現在のオランダ国王)が視察されました。当日は、運河水辺公園をご一緒に歩かれ、「利根運河碑」や「ムルデルの碑」などを熱心にご覧になり、しばしムルデルの功績をしのばれました。



文化財 伝えるひと・受け継ぐひと

地域の歴史や文化を知ること
豊かな人間性を育みたい

新川小学校校長 高橋 千代美さん

明治6年(1873年)に開校し、明治37年(1904年)にこの地に建て替えられた新校舎の遺産が、校舎の屋根に掛けられていた鬼瓦(市指定有形文化財)です。伝統のあるこの学校の歴史は、毎年、6年生が新入生に紹介するのが恒例となっています。



地域の皆さんにはボランティアとして植木の剪定から、書道や読み聞かせなどの学習・昔遊び体験の指導など、学校づくりにご協力いただいています。地域の文化や伝統を学ぶ田植え体験もそのひとつ。12月の収穫祭では「もちつき」などを楽しみます。

明治35年(1902年)に新川尋常小学校となった時に植えられたのがシンボルツリー「糸ヒバ」の木。「すくすくと伸びるように」という地域の方の願いが込められています。

学校の歴史や地域の文化を知って体験することが、穏やかな子どもたち、人の温かさを感じられる豊かな人間性の育成にもつながっていると感じています。



糸ヒバの木



「新川」[学]の文字の入った鬼瓦(市指定有形文化財)

文化財 伝えるひと・受け継ぐひと

地域の方々に愛されてきた
伝統の素晴らしさを伝えていきたい

流山小学校校長 大重 基樹さん

流山小学校は、明治5年(1872年)に近代教育制度の整備とともに開校した県内初の小学校です。明治22年(1889年)に創立地の常与寺内から現在の所在地に移転し、流山尋常小学校となりました。新築された校舎の瓦葺きの屋根には、学校を一字で表す「巒」の文字が刻印された鬼瓦(市指定有形文化財)が飾られました。現在、流山小学校の玄関内には、その鬼瓦が展示されているほか、当時の県知事から寄贈された「流山巒」の額(市指定有形文化財)が掲げられています。また、明治時代に造られた正門は、花崗岩の門柱と唐草模様の装飾が施された門扉からなる優美な欧風デザインで、当時の姿のまま、子どもたちの登下校を見守っています。

昨年春に流山小学校に着任し、代々大切に保



存されてきた本校の歴史を示す多数の資料に目を通していくうちに、本校が地域の方々に深く愛されてきたということが分かってきました。明治22年に建てられた校舎の建築費の多くが、地域の方々の寄附によって賄われたと聞か

す。学校の威厳を表すかのような鬼瓦や正門には、教育に対する皆さんの期待が込められていたのではないのでしょうか。

「ずっと守り続けられてきた大切なものが、この流山小学校にあるんだよ」と、子どもたちに伝えていきたいと思います。



流山小学校の玄関に飾られている鬼瓦(市指定有形文化財)



流山小学校正門

おおたかの森 古代のまちづくり史

つくばエクスプレス沿線開発が進む流山おおたかの森駅周辺。今では都会的な街並みが広がっていますが、昔はどのような場所だったのでしょうか。



住居跡(市野谷宮尻遺跡) [公益財団法人千葉県教育振興財団承諾]

1,600年前のニュータウン

流山おおたかの森駅周辺では、開発に伴う発掘調査が行われました。現在のおおたかの森小・中学校から駅にかけての場所では、1,600年前の村の跡が見つかっています。

100軒を超える住居からは、土器などの生活用品が出土しており、大きな集落があったことが分かりました。その周辺は、水や食料を調達しやすい環境にあり、古代版ニュータウンづくりが進められていたと考えられています。今も昔も住みやすい街(ムラ)だと言えるでしょう。



出土土器(西初石五丁目遺跡) [公益財団法人千葉県教育振興財団承諾]



江戸時代は馬の放牧地に

江戸時代、流山おおたかの森駅周辺は、小金牧と呼ばれる徳川幕府直営の牧として馬が放牧され、軍馬の生産地となっていました。牧と村の境には、馬の進入を防ぐ野馬除土手と呼ばれる土手が築かれました。現在でも流山おおたかの森駅東口から徒歩5分ほどの場所に見ることができます。



現在も残る野馬除土手の跡(十太夫)。木々の根元に小高い堤が見られる

井崎市長からのメッセージ

歴史や文化に触れて
昔の流山を思い描いてみませんか

意外に思われるかもしれませんが、流山市には、新選組や小林一茶といった日本史上に名を残す著名人ゆかりの地があります。また、先人たちがこの地で紡いだ歴史をひもとく文化財などもたくさん残っています。それらはいずれも、当時の流山を知るための貴重な史料です。



流山市長 井崎 義治

私たちが暮らすこの時代も、やがて流山市の歴史となっていきます。ぜひ、皆さんも先人たちが残した文化財や歴史に触れ、昔の流山にタイムトラベルしてみませんか。

企画展「まちづくりのヒストリア 歩いて掘って調べてわかる」

千葉県北部の11市が協力して、縄文時代から現代までの展示を行っています。縄文時代の集落やお墓、流山市の鱈ヶ崎三本松古墳、戦時中の施設などさまざまなまちづくりに迫ります。

開催中～3月11日(日) 9時30分～17時
※2月13日・28日および月曜休館(2月12日は開館)

所 博物館 費 無料

【学芸員による展示解説】

2月24日(土)、3月4日(日) いずれも11時から

【講演会 鱈ヶ崎三本松古墳に迫る】

① 2月24日(土) 13時30分から 筑波大学准教授・滝沢誠さん
古墳の副葬品について 電話

② 3月4日(日) 13時から 市立博物館学芸員 ほか
古墳の調査成果と周辺地域の埴輪 電話

問 博物館 ☎7159-3434

